

悪霊を追い出す主イエス

サムエル記上 19:9～10

マルコによる福音書 1:29～39

安息日に会堂で教えられ、汚れた霊に取りつかれた男を言葉で癒された主イエスは直ぐにカファルナウムにあるペトロの姑の家に向かいました。もしかすると町の誰かから姑が具合悪いことを聞いたのかもしれませんが。もしかすると奥さんかもしれません。ペトロは結婚していたのですね。ところがペトロとアンデレは今までの仕事や家族を捨てて出家したばかりでした。すぐに家に戻るというのも、いまだ世俗に未練があるのか、みたいに思われるかもしれません。イエス様ご自身も、後で富める青年との出会いで「はっきりしておく。わたしのためまた福音の為に、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てたものはだれでも、今この世で迫害を受けるが、家、兄弟、姉妹、母、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける」と言われます。そのようにイエス様に従うにはこの世の物を捨てるというような決断を求められる面も確かにあるでしょう。しかし今日の箇所のようにイエス様の一行は直ぐにペトロの姑の家に向かいました。もしかするとペトロはイエス様に姑のことを具体的に話したかどうかわかりませんが癒していただきたいと思ったかもしれません。そのようなペトロに対しても、イエス様は帰省してはならないなどと厳しいことは言わず、「すぐに」向かったのです。ここにイエス様の愛の広さを見ることができないのではないのでしょうか。家に着くとそこにいた人々は姑の様子を詳しくイエス様に伝えます。人々が集まっていたというのは姑がかなり重篤であったのかもしれませんが。イエス様は彼女に近づいて手を取って起こされました。すると熱が下がって癒されたのです。文字通り手当をされたのです。ここで少し注意して読むと、病気にかかっている人と悪霊に取りつかれた人を別々にしており、それぞれ大勢を癒されたところなのです。後でもイエス様の癒はいくつか出て来ます。しかしこれらは行われたものの一部であったことでしょう。どうも病気にかかっている人には良く手を差し伸べられて癒し、悪霊を追い出す時には言葉で叱ったりされたようです。手当で癒された姑は一同をもてなしました。この「もてなす」というのは所謂「食事の世話をする」というものですが、また「仕える」という意味もあります。私どもの教会には執事がおられますが、この執事という言葉もこの言葉「もてなす、仕える」から来ています。つまりここでイエス様に癒されたものが仕えるようになったのです。癒しを見て、また癒されて、ただそれだけで何もしないのではないのです。イエス様にお仕えるようになったということが大事なのです。主から与えられた大きな恵みに対して自分のできることでお返ししようという気持ちが起こったのです。弟子たちに対してのお手本のようなものです。福音書を読むと男の弟子たちはイエス様と共にいた時にはふがいない者たちでしたが、女たちは信仰的にもお手本となるようなものが多く知れされていることが分かります。イエス様が十字架に掛かれたときはその顕著な例であり、男たちは皆逃げ去ってしまいましたが、女性たちは十字架の下でイエス様を見上げていました。とにかくペトロやアンデレがキリストに従ったことにより、姑も信仰が得られたということが分かります。使徒言行録でも一人のものが救われるとその救いがその家族にも及ぶという所があります。またそれは私どもの教会においても実際にありうる事、あったことではないのでしょうか。

夕方になって日が暮れ始めると安息日も終わります。すると人たちは待つてましたとばかりに続々と病人や悪霊に取りつかれた人を連れてきます。多分この人たちはイエス様がペトロの姑を癒すのを見ていたあるいはその前から会堂で汚れた霊につかれた男を癒したのを見ていた人たちかも知れません。自分の知り合いを直してもらいたいという願いか、あるいは奇跡的な業癒しの業を見てみた老いという好奇心であったのでしょうか。そのような動機はわかりませんが、イエス様はお分かりであったでしょう。それでもこの人たちの動機は不純だとか利己的だとか言わず皆を癒されたのです。その日は夜遅くまで食する間も惜しんでイエス様は御業をなさったことでしょう。人たちはイエス様がお疲れだろうとかそのようなことはあまり考えず、とにかく癒していただきたい、癒されるのを見たいという思いでいっぱいだったのです。

翌日朝早く日の登らないまだ暗いうちにイエス様は起きて、人里離れた所へ祈りに行きます。日も登って朝に

なればまた勝手な人たちが続々と押しかけてくるでしょうから。イエスさまは独りで寂しいところで、勿論弟子たちさえ連れて行かずに、父なる神様と祈りにおいてお交わりになられたのです。このようなことによってイエス様は人と会った疲れや癒しの業を行った疲れをご自身が癒されて、リフレッシュされたのです。私どもももちろん教会で皆で祈りを合わせるときに、心が満たされることがありますが、誰もいない教会で一人で祈っているときに平安に満たされることも経験されている方も多いことでしょう。イエス様が祈りに出かかれたのは神殿でなければ会堂でもない人里離れた所でした。ある意味そこがイエス様にとってご自身の本当の教会であったと言えるかもしれません。イエス様は祈っておられると、案の定仲間がイエス様を捜しに後を追いかけてきました。「みんなが捜しています。」イエス・キリストを捜す、というのは何か意味深長です。真理を捜し求めるという意味もあるでしょうが、自分の思いをかなえるために追い求めるという意味もあります。あなたはなぜキリストを捜しているのか、と自問自答してみるのもよいでしょう。そこには自分の計り知れない罪があり、また惨めな自分を見ることになるかもしれません。弟子たちやそこに集った人たちは自分からイエス様の後に従うというよりは、自分たちの方にイエス様を引っ張ってきてそこにとどめようというものでした。方向が逆なのです。シモン・ペトロや仲間たちがイエス様を見つけて「みんなが捜しています」と言うと、イエス様はそちらに行こうとはせずに、「近くのほかの町や村へ行こう」と言われます。イエス様は、みんなのところに戻るのではなく、また大都会のエルサレムに赴くのではなく片田舎のガリラヤの町中で宣教をします。ガリラヤは最初の伝道地であり、また復活後のイエス様が再び弟子たちに活動を始めるよう命じた場所でもありました。

イエス様の福音宣教は悪霊追い出しや病気の癒しと共に行われました。それはご自身の神の子としての権威を実証してみ言葉を伝えたのでした。因みに悪霊を払う（悪魔祓い）というのは少し前までカトリックでもされており、下級司祭の身分の仕事であったようです。（エクソシストと言います）

このように多くの癒しをされ、救いのみ言葉を与えて宣教したイエス様が人々に本当に神の子であったと認識に至るのが十字架であったこと、それに至るまで苦難の僕として、弟子たちの無理解と群衆の軽薄さの中をひたすら歩み続けたことを思います。ただこのような神の子の堅忍が真の救い主の証しであり、実にそれが私どもの救いとなって今このように礼拝をお捧げしているのです。主のお招きによって導かれた私どもはこれからもキリストの後に従い、仕えて行けるように願います。